

10月11、12日に「NPO法
療学センターが中心となり、
在宅ケアを支えるための育てあ
り市民全国ネットワーク」の理
事に就任するため、札幌で開
かれた第21回全国大会に参加
した。

見創見 Tuesday

「地域を支えるための育てあ
り」をテーマに開催された。
在宅で療養する人と家族を
支えるためには、医師だけで
なく、訪問看護師やケアマネ
ジャーをはじめ、さまざまな
職種がチームとして連携する
必要がある。

しかし、職種や立場が違う
と、お互いの考え方や感じ方
が分からなかったり、物事を
どう伝達するべきか戸惑った
りすることが多い。それぞれ
の役割や考え方を知った上
で、互いに尊重し、一つの目
的に向かって助け合うために
は、相互に教え合い、育て合
うことが必要だ。

現在、国が推進している地
域包括ケアの先駆けとなる地
域づくりの活動を始めた歴史
ある団体で、今回は私が以前
に所属していた北海道家庭医
療学センターが中心となり、
在宅ケアを支えるための育てあ
り市民全国ネットワーク」の理
事に就任するため、札幌で開
かれた第21回全国大会に参加
した。

「教え合い」「育て合い」が必要だ

いう育て合いが必要となるだ
ろう。

医療においても、知識や技
能は日進月歩である。医学部
を卒業して何年もたち、学生
時代に学んだ知識とは全く異

なる知識や技術が求められる
ようになると、日々の診療を
こなしながら、一から学んで
いくことは非常に困難とな
る。当院も家庭医を育てる研
修プログラムに参加している

が、研修医を育てつつ、新し
い知識を効率良く学べる育て
合いの場ともなっている。

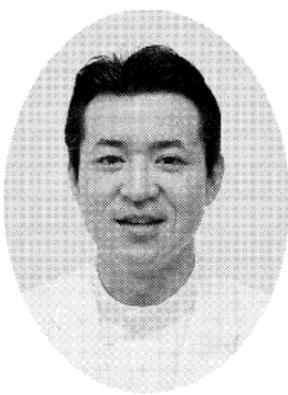
考えてみれば地域社会その
ものが、あらゆる分野で互い
に育て合うことで成立してい
る。

市民全国ネットワークのモツ
トーは、「安心して子育てが
でき、老いても障がいがあっ
ても、自分らしく暮らすこと
ができる地域コミュニティ
の創造」となっている。この
理念は当院の理念と完全に一
致するものであり、家庭医療
の考え方そのものである。

現在も在宅医療の体制づく
りに取り組んでいるが、目的
は地域全体の在宅医療体制の
底上げである。現状として、
在宅医療に携わる医療機関は
需要をはるかに下回ってお
り、今後急速な高齢化によっ
て、さらに足りなくなる可能
性が高い。

小倉 和也

はちのへファミリー
クリニック院長



おぐら・かずなり
1972年生まれ。
2010年に国内でも珍
しい家庭医療の医院
を八戸市で開業。国
際基督教大、琉球大
医学部卒。八戸市出
身。

在宅医療

子どもを育てることで親と
して成長し、生徒を教えるこ
とで教師も経験を積み成長す
る。どの職場でも教えられる
立場から教える立場になるこ
とがあるかと思えば、別の場
面では教える側が教えられる
側に回ることもある。

子どもを育てた親が年老い
てくると、いつかは子が親を
支える側になる。家族内だけ

在宅医療を行っている医院
の多くは容量超過状態である
が、当院も医療の質を維持、
向上していくためには、現在
の在宅患者数までが限界と考
えている。地域全体で受け皿
がつくられるよう、育て合い
に貢献していきたいと考えて
いる。

支える側になる。家族内だけ

心して子育てと介護ができ、
仕事をしながら生活できる地
域を医療で支えることはもち
ろろ、それが可能な地域づく
りにも積極的に貢献すること
が、家庭医クリニックの使命
であると言える。